

大学男子新体操指導者の現状

—男子新体操競技に対する捉え方—

University's Men's Rhythmic Gymnastics Coaches Recognition for Coaching

菅 正 樹 ・ 山 本 清 文

大学男子新体操指導者の現状 －男子新体操競技に対する捉え方－

University's men's rhythmic gymnastics coaches recognition for coaching

菅正樹(花園大学非常勤講師) 山本清文(花園大学)

I. 序論

1. 背景

コーチングの質は、コーチングを受ける選手の競技力に影響を与える。そればかりでなく、競技経験そのものを選手がどのように捉えるかに対して少なくない影響を与えていると考えられる。スポーツ指導者の資質能力向上のための有識者会議(タスクフォース)報告書によれば、新しい時代にふさわしいコーチングとは「競技者やスポーツそのものの未来に責任を負う社会的な活動」(文部科学省、2013)と記されている。また、図子によると、コーチングにおける目的と行動は2つに分類でき、「競技力の向上を目的とした指導行動」「人間力の向上を目的とした指導行動」(図子、2014)というものがある。つまり、指導者は競技力の向上のみならず、選手の人間的な成長を促すことも重要であり、そのコーチング実践の過程において、競技の発展を目指していかなければならない。

コーチがとる言動は、そのコーチが自らの役割をどのように捉えているのかによって形づくられている。コーチの果たすべき主な機能や役割には、ビジョンと戦略の設定、環境の設備、人間関係の構築、練習での指導と競技会への準備、現場に対する理解と対応、学習と振り返りという6つがあると言われている(ICCEら、2013)。ビジョンと戦略の設定では、目的を明確にし、コーチ自身の思いに依存するのではなく、選手たちを理解して行う必要がある。すなわち、選手たちの背景に合わせた目標設定を行い、どのように達成していくのかを示すこともコーチの役割であると言える。

また、指導者はコーチング哲学を持っていることが指導において重要であるとも言われている。佐良土（2018）によると、「コーチング哲学とはアスリートやチームの卓越性を向上させ、その卓越性を発揮させるコーチング実践において、さまざまな原理として目指される目的、コーチの方向性を与える基本的方針、コーチによって設定される価値観についての包括的な言明である」と報告されている。指導者がコーチング哲学を構築することで、自らの方向性を失わずに、自分自身をも確固たるものとしても持ち続けることができるということを示唆している。また、俵（2001）は、「その指導者の行動範囲となる一般的な哲学を持っているということ、そのような哲学を持つべく努力するということは、指導に成功するために不可欠なことである」と述べている。つまり、指導者がコーチング哲学を構築するためには、指導者自身の学びが必要不可欠である。日本スポーツ協会のコーチ育成のためのモデル・コア・カリキュラムの基本理念の中に、「スポーツ指導者（コーチ）は、スポーツ科学やスポーツ医・科学の知識・技能を身につけていることはもちろん、それ以前にスポーツの意義と価値を理解した上で、スポーツとは何か、何のためにスポーツ指導をしているのかを常に自分自身に問いかけ、成長し続けなければならない」（日本体育協会、2016）と記されており、指導者が自ら指導を行うスポーツに対して深く考え、その競技に対しての意義と価値を見出して指導を行う必要がある。スポーツ指導者の資質能力向上のための有識者会議（タスクフォース）報告書によれば、「コーチングは、常に新たな課題を発見する営みであり、コーチは自ら学ぶことを続けなければならない」（文部科学省、2013）と述べられていることから、指導者が自らを振り返り、新しい課題を見つけ、成長し続けることが指導者として重要であると言える。

男子新体操の指導に関する資料は数少なく出版されているが、現場での実践における資料や研究はほとんどない。男子新体操のコーチングを行うにあたって、拠り所となる枠組みや理論がなく、それぞれの経験に頼って指導を行っている現状がある。採点競技は試合でのパフォーマンスが点数化され優位決定が行われる。つまり、練習の成果を試合で発揮できなければならない。限られた指導者の中でも団体、個人競技共に優勝経験のある指導者は質の高いコーチングを行っている

と考えられる。今後、より良い競技経験を選手に対して提供していくためには、現在の指導者達の考え方を顕在化させ、評価可能な形としてまとめることが重要なステップとなると考えられる。つまり、優勝経験を有する指導者を研究対象とすることはトップレベルのコーチングを明らかにする上で重要であると考えられる。

2. 目的

そこで本研究では、大学男子新体操指導者が男子新体操競技をどのように捉え、コーチングを行っているのかを明らかにすることを目的とした。

男子新体操競技に関する基礎的な知識

本研究を遂行する、あるいは得られた結果の適切な解釈を行うにあたり、男子新体操競技の基本的な事項を把握しておくことが必要不可欠であると考えられる。そこで、最初に男子新体操競技についての歴史や競技特性、現状について概説することとする。

3. 男子新体操の歴史

男子新体操競技とは日本発祥のスポーツであり、日本の新体操は徒手体操をはじめとして現在の競技に至っている。その徒手体操の歴史を見てみると明治5年(1872)「体術」を起源とし「体操」「徒手運動」「軽体操」「普通体操」と名称を変えつつ学校教育の教科として発展してきた(園田、1994)。競技としての男子新体操は、デンマーク体操などをもとに日本でつくられた競技と考えられている(野田、秦、2015)。1946年第1回国民体育大会(京都)にて「団体徒手体操」をデモンストレーション形式で演技を披露。翌年、第2回国民体育大会(石川)で初めて「団体徒手体操」の名称で実施した(日本体操協会、2014)。1967年に新体操に改称し、競技内容も従来の団体体操と個人種目が入れられた。男子が団体徒手体操の規定と自由、個人種目はタンブリング、女子は団体手具体操の自由、個人種目は手具体操で競技が行われた。国体での男子団体徒手の規定演技は、心身の健康および徴兵検査において合格者を増やすための目的に行われていた「大

日本青年体操（男子青壮年向）」が新体操の規定演技としても取り入れられた（田中、山本、2019）。

2001年より国際的な競技の普及を目指し、指導者の派遣を行い、2003年2005年と2回に渡り、男子新体操海外交流競技会が全日本新体操選手権と同時に開催された。また、2002年2004年2006年においてはオープン参加という形で全日本新体操選手権大会に海外からの選手が出場した。男子新体操の世界大会を2006年に開催することも目指されていたが、大会自体が不開催に終わった。指導者海外派遣事業は、2005年大会をもって資金が枯渇し、また日本側の組織的な事情などがあったため中断に終わった（野田、秦、2017）と報告されている。競技人口の少なさ、国際性がない事を理由に2008年大分国体を最後に実施種目から外され、現在は休止の状態である。

4. 男子新体操の競技特性

「新体操の演技は徒手要素と転回要素を織り交ぜ、団体競技では6人の同時性と力強さを、個人競技は4種目の種具の特性に合わせた操作を、身体を極限まで運動させながら表現する種目である。各競技に求められた操作をすべて含み、高い技術的価値と各種要素の多様性、音楽と動きの関係や独創性を持ち、すべての運動が合理性と安定性をもって実施されなければならない」（新体操男子規則2015年度版第44条、p10）。

「男子新体操は、技術の向上のみにとどまらず、演技の構成など生徒・学生の創造性を指導することも重要であり、その点において他の運動部活動とは質的に異なる可能性がある」（野田、秦、2015）。つまり、男子新体操の指導者は技術的指導のみならず、演技創作の指導も行わなければならない、他競技に比べて指導の複雑さがあると考えられる。また、チームの方向性を決定する権利を有する指導者のビジョンと戦略の設定が選手や創作する演技構成に大きく影響するのではないかと考えられる。

5. 男子新体操競技の現状

男子新体操競技の現状として世界大会や実業団等もなく大学以降競技を続ける環境が極めて少ない。大学新体操競技会に焦点を絞ると、2018年度全日本学生新体操選手権大会出場校は11校であった。その中で団体、個人競技共に出場している学校は4校であり、競技人口が少ない事に比例して指導者の数も限られている現状がある。

II. 方法

1. 対象

対象は大学男子新体操競技の男性指導者3名とした。対象の選定理由として、現役時代に男子新体操競技で全国大会優勝経験を持ち、男子新体操競技会において最上位のカテゴリーが大学であるため、大学男子新体操の指導経験が10年以上であること、個人競技、団体競技共に全国大会で優勝経験のある指導者として3名を対象とすることとした。

2. データ習得

調査方法は半構造化インタビューを採用した。半構造化インタビューは大まかな質問の内容だけが決まっており、回答者の回答次第で深く掘り下げて意見を聞くことができる形式で、新たに湧き上がった問いに対して柔軟に対応できる利点があるとされている（寺下、2011）。研究対象者の根底にある物の見方や認識を詳細に聞き出すことができると考え、半構造化インタビューを採用した。研究対象者に対しては研究の目的、意義等を説明し研究参加の依頼をした。調査期間は2018年8月から10月であった。研究対象者に負担をかけず、よりリラックスした状態でインタビューを行えるように、インタビュー日時と場所については、研究対象者から意見を聞いた上で決定した。インタビューは研究対象者の同意の下、ICレコーダーを用いて、全ての会話を記録した。インタビュー時間は一人当たり65～75分であった。インタビューがわき道にそれてしまうのを防ぐのと同時に、調査協力者が自分の論点や見解を即興で話せるように、インタビュー・ガイドラ

インを用いてインタビューを行った。インタビュー・ガイドラインの作成にあたり、コーチング学に卓越している教員と、コーチング学を専攻している学生からの助言を受け、1名の指導者にプレインタビューを実施し、適宜修正を加えた。インタビュー・ガイドラインでは指導者に内在している男子新体操競技に対する価値観や認識、男子新体操指導者の役割、指導者の資質や選手に求める資質、具体的な実際のコーチング手法、今後の方向性の5項目を設けた。半構造化インタビューの長所である開放性や文脈情報が犠牲にならないよう、インタビュー・ガイドラインの質問項目やその順番に捉われすぎないように留意して行った。

3. データ分析

本研究は、大谷（2007）により報告されているSCAT（Steps for Coding and Theorization:以下SCATとする）を参考に分析を行った。SCATは比較的小さいデータに適用しやすいとされており、一人ひとりのコンテクストを抜き切らずに分析を進めていくため、個人を理解するのに適している。大学男子新体操指導者が比較的少ない研究対象者であり、男子新体操指導者の男子新体操に対する捉え方は、研究対象者個人によって異なる可能性があり、一人ひとりを理解することに焦点をあてるため、SCATを用いることが適した研究であるといえる。分析手順は、録音した音声データを逐語録にまとめ、それを大谷が作成したSCATのフォームを使用して分析した発話情報の中から注目すべき語句（第1ステップ）、それらを言いかえるための語句（第2ステップ）、第2ステップの語句の説明となる、発話情報外の概念（第3ステップ）、全体の文脈を含めたテーマや構成概念（第4ステップ）とこの4つの段階で進めた。分析から得られた構成概念をもとに、研究対象者一人ひとりのストーリーラインを作成した。分析の妥当性を確保するため、分析にはコーチング学に卓越している教員1名とコーチング学を専攻している学生1名、そして筆者での分析確認を行い、構成概念の生成においても助言を受けた。また、ミーティングにおいて、分析結果を定期的に報告し、意見を仰いだ。

Ⅲ. 結果

本研究では、3名の男子新体操競技指導者に半構造化インタビューを実施し、SCATを参考に質的分析を行った。得られたインタビューデータから各コーチの男子新体操競技のコーチングに対する認識をストーリーライン化した。以下にそれぞれの指導者のストーリーラインを示した。

1. Aコーチのストーリーライン

Aコーチは男子新体操競技を日本の文化として捉えており、団体競技を例に挙げると自己犠牲の精神が大事な日本的スポーツという認識を持つ。Aコーチは競技の発展性を考え、大学男子新体操の現状を打開し、国際化を目指したい想いから大学での指導をスタートさせた。男子新体操競技は競技人口の少なさや世界大会が無いことを理由に国体から外れた経緯があり、国際化を図りアクロ体操との融合を目指した。アクロ体操も種目を削らなければならない現状があり、融合するメリットは日本にしかないというアクロ体操側の意見から、国際大会の実現には至らなかったとAコーチは回顧した。その際にアクロ体操側から男子新体操が得た評価には、男子新体操の同時性や動きの緩急といった芸術的評価の高さがあり、Aコーチは、男子新体操の芸術的価値を再認識した。国際化を目指すため、世界共通のルールを作ることで男子新体操競技の方向性を曲げるよりも、現在の男子新体操競技を守ることが自分の仕事であると認識し、男子新体操の特徴を再認識するに至った。日本人の魂が練習の過程に存在し、日本的な集団の力や和の大切さ、達成感を学べる男子新体操に教育的価値を見出しており、今の社会に必要と感じている。日本の文化として男子新体操を発信していくことで、社会的な認知度を高めたいと考えている。男子新体操を発信するためには勝つことが必要であり、勝たなければ周囲が認めてくれないという認識をもっている。指導者は時代の流れに順応し柔軟な姿勢で選手が理想とするところに到達できるように導いていくサポート役であると考えている。また、普及活動も指導者の役割であり、社会的認知の重要性、認知されることで競技人口が増加することが今後の発展に繋がるとの認識を持つ。男子新体操というスポーツが理解され、次の世代が

競技の説明をせずに胸張って言える競技にしなければならないという意志を持って指導を行っており、男子新体操の方向性を考える指導者でありたいという想いがある。コーチングにおいて「先見力・準備力・徹底力」の3本柱を基準に先を予測しながら準備し、決めたことを貫くサイクルが勝利に繋がっていると考えている。演技の目的として人の感情を揺さぶりたい。指導で生身の自分を出し、言語ではなく、指導者の取り組む姿勢を選手と共有する事で選手との信頼関係を構築している。指導者は選手を預かっている立場であり、選手がついてきてくれる資質を磨かなければならないという認識を持ち、指導者が先頭に立ち、能動的に男子新体操を意識して考える指導者のリーダーシップが重要であると認識している。選手は男子新体操を通して自分の意志や目標設定の大切さ、失敗から学んで改善を繰り返すプラン重視のサイクルを考えることが今後の人生に関わる重要性を認識し、競技成績だけでなく、トップアスリートの思考を学んで欲しい。良い競技成績を残した選手は一律に主体性が高いという認識を持っており、選手の指示待ちを無くすような指導、社会に出た時に通用する人間教育の指導を徹底している。

2. Bコーチのストーリーライン

Bコーチは人の心が体現化されるスポーツとして、男子新体操を捉えており、個人競技では自分を表現したい、認めてもらいたいという意識が強く、さらには想像力が豊かで、自分のイメージを形に変えていける能力が必要という認識を持つ。個人競技は個人名で出場するため団体競技より有名になることができると考えている。そして、自由に自分が表現できる反面、失敗すれば全部自分に返ってくる。そこにBコーチは個人競技の魅力を感じていた。団体競技は日本人ならではのスポーツであり、日本人の思いやりの心が詰まった種目と捉えており、協調性や献身的な日本人らしさを求めたら行きつくスポーツの1つの形である認識をしている。指導者になり、団体競技と向き合う経験を通して、団体は誰かが頭であり心臓であり、そのどれもが機能していなければならず、一つの生き物として考えられるかどうかの目線が非常に重要であるという認識を持つようになった。

オリンピックスポーツではない競技だからこそ人間力を鍛える事を強調できるスポーツであり、勝利至上主義ではなく心を育てることにより心に内在していることが現れると認識している。選手主体で導くことが指導者の役割であり、選手に考えさせる選手主体の指導法の中で選手の意見に対して否定することに指導者としての苦しみを感じており、楽な方向に流れないように誘導する指導者のリーダーシップの必要性を感じている。理想は4年間で先生に上手くしてもらった気持ちになって欲しくない。競技生活の中で心の中に自分（Bコーチ）が居なくても構わない。選手自らの力で達成させることが選手主体であり、選手の自律性と人間的成長を重視している。指導者は忍耐強さと選手に対する諦めない姿勢が重要である。他のスポーツとも共通する項目として、人間としての基礎をつくることが指導者の重要なポイントであり、諦めの悪さが練習に現れ、我慢して耐えることの出来る人間としての基礎をつくることでその基礎を元に技術を習得する感覚を持つ。ヒントは与えるけれど答えは教えない。選択肢を提示し、選手に判断させることにより、有能感や責任が生まれ、行動に移す連鎖を作る指導を意識して行っている。試合に出られない学生に対しても部活の中で役割を与え居場所を作り、生きる道を提示することで充実感を与える。大学は最後の学びの場として、男子新体操という媒体を通して培った人間力や判断力が社会に出た時に通用する認識があり、選手の社会的自律を根源に指導を行っている。競技として理想が無いことが理想であり、様々な種類の表現をする選手が来た時にも対応できるように幅を広げているルールであり、男子新体操の魅力を狭めるものではないという認識を持っている。国際化を目指す場合、ルールを明確にしなければならない認識を持ち、明確にすることで今の男子新体操が消えていくことを危惧しており、海外に行かせたい傍ら日本の男子新体操を守りたいという思いから板挟みの状態である。多様性があり、不明確なのが男子新体操の魅力であり、明確にしすぎない方がいいと認識している一方で、競技としての葛藤はあるものの、それが男子新体操の良さであると認識している。

3. Cコーチのストーリーライン

Cコーチは男子新体操の魅力は点数だけではなく、演技は自己紹介であり、喋らない言葉と捉えており、自分の内面を形にできる自己表現方法の一つと認識している一方で文句を言われて減点される競技とも認識しており、競技としての男子新体操と表現としての男子新体操の2局面から男子新体操を捉えている。競技規則の中で自己表現をする難しさや競技成績も出さなければならない指導者の役割も認識している。演技に対するアイデアや使用曲など、選手の特徴に合わせたヒントを与える。選手の特徴を活かし、表現の幅を広げるための指導を行っており、強制はしない。Cコーチが強制的に指導を行うことにより、選手自身の自分が無い演技になることを危惧している。Cコーチは男子新体操的にマイナスな行動を隙があると捉えており、隙とはCコーチ自身が現役時代に日常生活などからも意識していた男子新体操的に良くない行動であり、競技成績を伸ばす選手は日常から他者の目を意識しており、人に見られるスポーツ（採点競技）である男子新体操競技は先入観が点数に影響する認識を持ち、他者から見られている意識を持つことの重要性を認識している。また、指導者の役割として、試合の精神状態でノーマス率が変わるという認識を持ち、試合の時に選手の性格に合わせた声掛けが必要であると考えている。選手の自信を無くさないように方向性を決定することも指導者の役割であると認識している。指導を始めた頃はトップレベルの高校の練習に見学に行き、トップダウンの指導スタイルを模倣したが集団の前で話すことが苦手なCコーチ自身の性格特性もあり、自分にしかできない指導を模索した。選手と同じ目線に立って、選手が話しやすい関係を構築することで他の指導者とは異なる選手との距離感を意識し、指導者と選手の壁がある指導ではなく、選手に合わせる指導を目指した。選手に怒れない自身の性格特性を認識しながらも、自分の指導に対して時には問題解決に時間がかかり効率が悪くなるといったデメリットも認識している。選手に対してはH大学にきてよかったと思って欲しい。選手の幸福度を高めたいという根源的な願いがある。選手の幸福度を高めるためには他者からの支援も必要であり、信頼関係の構築が重要であると認識している。Cコーチの人間関係における価値観として男子新体操の技術だけで

はなく、選手の特性をCコーチ自身が探し、選手に対して肯定的な意識を持つよう心掛けていた。人は自分を映す鏡であり自分が嫌いになったら指導できないと認識している。

IV. 考察

本研究は、大学男子新体操指導者がどのような考えを持ちコーチングを行っているのかを明らかにすることを目的とし、半構造化インタビューを実施した。

大学男子新体操指導者は男子新体操についての捉え方として、日本の文化的スポーツである認識と自分の内面を体現化できる自己表現方法の一つという認識を持っており、大学男子新体操指導者はこれらを根底にコーチングを行っていることが明らかとなった。また、「考える」というコーチング手法が共通しており、考え方を学ばせる指導を行うことで人間形成や創造性の指導も行っていることが明らかとなった。結果から読み取ることができた指導者のコーチングの根底にある男子新体操競技の捉え方と各指導者に共通しているコーチング実践について考察を行う。

1. 男子新体操に対する捉え方

男子新体操指導者は指導者になってからの経験などを通して学習し、男子新体操競技に対しての価値観や目的を認識しており、それを根底にコーチングを行っていることが明らかとなった。男子新体操競技は日本発祥であり独自に発展を遂げたスポーツである意識が強く、国際化を目指して普及活動を行った際の海外からの反応や意見などから、日本人の協調性や献身的な自己犠牲心のような、日本的な魂が練習の過程から必要なスポーツであると研究の対象者達は考えていた。そのことは次のような発言からよく読み取ることができる。

「日本独自のモノ。日本発祥のスポーツ、団体を例に挙げると自己犠牲の精神が非常に大事なスポーツと思う。それが日本的だと思ってる。」(Aコーチ)

「日本人の思いやりの心が詰まった種目だと思ってるので凄く日本的。日本人気質なスポーツだなと感じる日本人って自分よりも他人って所があるから、そういう部分が形に現れたスポーツ。日本人が日本人らしさを求めたら行きつくのがこれじゃないかなと思う。そういうスポーツの一つの形だと思っている。」(Bコーチ)

また、男子新体操は人の心が形になって表れるスポーツであり、個人の特性やチームの特性を形にできる自己表現方法の一つであると認識しており、自分の内面を体現化する方法であると考えている。男子新体操競技は審判員が採点規則に基づいて優劣をつけるスポーツであり、そこには審判員の個人の主観が入らざるを得ないことから、技術の高さのみならず、演技を見ている人に対して自分に内在しているものを伝えることが重要であることを指導者が認識していることが次の発言から読み取れる。

「自分の中にあるものを出したい。新体操は言葉って表現。言葉で表現するんじゃなくて演技で自分はこういう人ですよって喋るような物。」(Cコーチ)

「人の心が形になって表れるスポーツ。姿勢、思想、そういう物が演技を通して見えてしまう。練習をしている人はそれだけ濃厚なものに見える、薄い考え方でやってる人は上手くても下手くそに見える。」(Bコーチ)

以上のように大学男子新体操指導者は男子新体操競技を優位決定だけを行う競技としてではなく、文化や表現としても認識している側面があり、男子新体操に対する価値観が内在していることが読み取ることができた。指導者の持っている価値観と実際のコーチングは密接に関わりあっているのではないかと考えられる。

2. 男子新体操の指導

新体操における競技力を高める指導に関する研究（橋本ら、2013）によれば、

競技者の経験年数12年前後の競技者には、コーチが練習や演技創作を計画し、実行させる事に加えて、競技者の美的な意識を高めるような指導を行うことで、競技力を高めることができるのではないかと報告されている。また、同じ採点競技である女子新体操競技の側面から見ても、浦谷（2011）は「新体操における美とは、大胆にして繊細であり、感動を多くの人に伝える表現方法であり、美を判断することは困難極まりないことともいえる」という。これらのことから、美という抽象的なものに対する指導は容易ではないと解釈することができるだろう。また、この指導とは採点競技、表現スポーツ特有の競技特性であると言える。採点競技とは競技規則が変化され続けるスポーツであり、競技規則の改変に対応できる様にコーチングしなければならない。効果的なコーチングとは、「あるコーチング状況において、一貫して専門的知識、対他者の知識、対自己の知識、を駆使し、アスリートの有能さ、自信、関係性、人間性を向上させる」（CôtéandGilbert、2009）と述べており、有能さ（Competence）、自信（Confidence）、関係性（Connection）、人間性（Character）、これらの英単語の頭文字を取って4C'sと呼ばれており、4C'sを育むためにコーチに必要とされるのが専門的知識、対他者への知識、対自己の知識である。野田と秦（2015）は、男子新体操指導者は創造性を指導することも重要であると述べられていることから、男子新体操指導者は、選手の有能さを向上させる指導を行うことにより、表現したい演技を選手が主体的に創作することに繋がっているのではないかと考えられる。創造性の指導には、技術的な指導のみならず、選手に考え方を学ばせる指導を行う重要性が次の発言から読み取ることができる。

「考えなきゃだめだ。なんでも考えてなければだめだ。常にどっからでも、構成作るのもそうだし、どこにいたって頭からそれが離れてるようではダメだと思ってる。俺は。何かに着け、共通に意識して新体操に置き換えたらこうじゃねえと考えると。色んなところからアンテナ張ってなきゃいけないと思ってる。」（Aコーチ）

「あまりにも道が違うときにはバシッといく。だけどそれ以外の時は基本的に自分で考えさせる。思想であったり、そういう物が演技を通して見えてしまう。やっぱり薄い考え方でやってる人は上手くても下手くそに見える。」(Bコーチ)

「もしかしてこれ新体操に使えるんじゃないかと演技に使うんだったらどうやって使うかなとか。常にチャンス。上手くなれるこれはチャンスなんじゃないかな、これを使うとしたらどうするかなとか考えれる人。それが大事。」(Cコーチ)

これらの発言から、男子新体操指導者は自発的に考える選手を育成することで選手の有能さの向上を目指しており、人間形成や創造性の指導にも繋がっていると考えられる。男子新体操選手の有能さを高めるためには、選手の身体的特徴や性格的特徴を的確にとらえ、選手やチームを理解した演技創作を行う必要がある。指導者と選手の関係性がパフォーマンスに影響するため、指導者と選手の好ましい関係性を意図的に構築していくべきである(伊藤、2016)と述べられており、指導者と選手の関係性が創作する演技構成にも大きく関わってくると考えられる。指導者が選手またはチームを理解しながら演技を創作することが好ましい関係性であるといえるだろう。

男子新体操指導者の専門的知識には技術指導のみならず、演技を創作する空間構成能力など、創造的能力が必要な知識であり、指導者自身が創造的能力を向上することが創作する演技に大きく関わりを持ち、選手やチームの方向性の決定に関係していると考えられる。指導者としての能力を向上する知識を対自己の知識と呼び、対自己の知識は自己認識と省察の2つに分けて考えることができる(伊藤、2017)。創作した演技を振り返り、省察を行い、改善すべき課題を見つけることより、新しく創作する演技構成の斬新さや技術の向上に繋がり、演技を見た人達に独創性を感じさせられるのではないかと考えられることから、創造性の指導を行う上でこの知識はとても重要であると考えられる。また、次のコメントに表れているように、演技を創作することが指導者の困難であると感じている指導

者もいた。

「作る苦しみていうのは凄くきつくて。停滞は負けだと思ってる。去年と同じレベルで去年と同じ考えではダメだよって事はいつも言ってる。進化がなければ人は認めてくれないし。1番俺の中の苦しい所だけど。」(Aコーチ)

研究の対象者達は男子新体操に対しての価値観や目的が明確に内在されているからこそ選手たちに対して一貫性のある指導が行えており、競技規則に含まれる「独創性」や「多様性」を理解し、選手、チームの特性に順応していくコーチングが行えるのではないだろうかと考えられる。佐良士は「確固としたコーチング哲学を持つことで、コーチは精神的な安定性と指導における安定性の両方を獲得することができるようになるだろう」(佐良士、2018)と述べている。

演技が多様であるという事実認識は観客や選手に共通してもたれている(秦、野田、2017)と報告されており、観客や選手らと同様に大学男子新体操指導者達も多様性に対して肯定的な意識を持っている。多様性や独創性などの採点基準が曖昧な部分において、競技スポーツとしての問題認識を持ちながらも、男子新体操競技の多様性は残した方が良いと認識していることが次のような発言から読み取れる。

「余りにも競技ってなると規定演技やってる人達。競技としては問題あるかもしれないけど、芸術性というか、ほやけた所は消さない方が面白さがあるんじゃないかなと思ってるんだけど。」(Cコーチ)

「新体操競技の中でのルールがある訳だから、縛られた上でそれだけの発想力がある訳で。おれはこの多様性でいいと思ってる。これが余計縛まってくることによって、見え方が違ってくるなどというのものもあるし、まだまだ可能性はあるんだっていう競技。これだけ同じ種目なのにおもしろいよね。」(Aコーチ)

多様性が男子新体操競技の魅力であると認識している反面、国際化を目指す場合には多様性や独創性を明確にしなければならないという認識も存在している。国際化を目指す際に、日本から海外派遣された男子新体操指導者の中には、競技が国際的に普及する中で競技内容や競技規則に変化が起ることを危惧する者と、変化を受け入れるしかないと考える者がいた（野田ら、2017）と報告されている。また、カナダの男子新体操選手および指導者を対象にした研究によれば、男子新体操を独自性に満ちた競技として理解していること、他の競技に吸収されたり他の競技と合併したりすることなく、その独自性が維持されるべきだと考えていることがわかった（野田、秦、2017）と報告されており、本研究の対象者からも国際化と日本発祥という誇りの間での葛藤が読み取れる発言が得られた。

「世界に向いていってなったら共通のルールを作っていかなければいけない。何かを削りながらやっていって新体操ですっていう風になるかもわかんない。だったら今の新体操を守っていくべきなのが俺の仕事じゃねえのかなというのが今の俺の考え。」(Aコーチ)

「海外に行ったときにはっきり明確にルールを作らないといけない。そうなると今俺らがやってるようなものは消えていくと思うんだよ。それは俺らとして好ましくない。だから海外に行かせたい。傍らやっぱり日本の新体操を守りたいという思いもあるからその板挟みにはあつてる。」(Bコーチ)

大学男子新体操指導者は、現在の男子新体操競技を日本の独自のスポーツとして守っていくべきなのではないかという考えを持っている。国際化を目指していくためには競技規則や評価基準を明確にすることが必要である認識を持つ。しかし、それは多様性や独創性を失うことに繋がり、現在の男子新体操の魅力を制限してしまうことを危惧していることが推測される。また、2人の指導者からは男子新体操の国民体育大会競技採用、復活を語っており、現在の男子新体操を守ることと発展させることの両方を実現させるために国民体育大会への採用を重要視

していることが推察される。そのことは次のような発言からよく読み取ることができた。

「自分の目標は初め世界って物があったんで、もう世界選手権なりオリンピックなりを作りたいって。でも今は1番は国体復活。万人が、男子新体操ってこういうスポーツだって物をみんなが理解してくれるような物を作りたいなって思ってる。」(Aコーチ)

「(国際化) できるんだっいたらした方がいいとおもうけど。特に国体とかじゃない？高校の指導者も国体で採用みたいなのも多いから教員免許取っても新体操できなとかそういう人も多いじゃん。今後心配じゃん。先生たちが定年退職した時にどうなんの指導者居なくなつてつぶれちゃうの？みたいな。」(Cコーチ)

3. 本研究の限界と今後の展望

本研究は、コーチの内面的な部分に焦点を当てインタビュー調査を行った。佐良土(2018)は「価値観を持っていると明言したとしても、それを実行に移さなければ、本当の意味でそうした価値観を信じていることにはならない。実行こそが真実なのである。」と記されている。本研究でインタビューによって得られた内容が、実際に現場でのコーチング行動として実践されている内容なのかどうかについては確認できていない。それを確認するためには、実際のコーチング行動を観察し分析する必要がある。ただ、思考と行動の間に幾分かの隔りがあるとしても、指導者が語った内容であることは確かである。本研究の結果を解釈する際には、インタビュー調査の結果であることを念頭に議論を進める必要がある。また、本研究で対象としたのは大学男子新体操指導者3名のみであった。本研究で得られた結果が、全ての男子新体操指導者に対して一般化して適応できるかどうかは考えにくい。ただ、男子新体操指導者が少ない現状と、今回の研究対象者が日本の大学男子新体操指導者の中でも経験が豊かで競技成績もあげている者であったことを鑑みれば、おおよその方向性は見いだせたものと考えている。今後

はさらに多くの指導者を対象に研究を進めていくことで、より包括的な男子新体操指導に関する知見を得ることができると考えられる。

競技規則の変遷と指導法の関係性も興味深い点である。男子新体操をはじめとする採点競技は競技規則が変化し続けているスポーツであり、競技規則の変更にともない、求められる演技内容も変わってくる。競技規則の改変がどのように指導者の考え方やコーチングに影響を及ぼすのか、女子新体操やフィギュアスケートなどの芸術スポーツの様な採点競技との比較や、大学以外のカテゴリーの男子新体操指導者がどのようなコーチング観を持ち、指導を行っているのかを比較し分析することも今後の研究課題としては興味深い。

V. 結論

本研究では、大学男子新体操指導者が男子新体操競技をどのように捉え、コーチングを行っているのかを明らかにすることを目的とし、半構造化インタビューを実施した結果、以下のことが明らかとなった。

- 男子新体操競技を優位決定だけを行う競技としてではなく、「日本の文化的スポーツ」「自己表現スポーツ」として、男子新体操に対する価値観が内在していることが明らかとなった。
- コーチング実践においては、創造性の獲得や人間形成を目的として自発的に考える選手の育成を目指していることが明らかとなった。
- 競技として採点基準の明確化の必要性を認知しているが、それと同時に採点基準の明確化が男子新体操の魅力である多様性や独創性を損なうことに繋がることを危惧していることが明らかとなった。

大学男子新体操指導者は以上のことを認識しながら指導を行っていることが明らかとなった。男子新体操指導者は選手の育成のみならず、マイナースポーツで

ある男子新体操の普及を視野に入れながら、競技としての発展を目指す事が重要であると言えるだろう。

参考文献

- (1) Côté, J. and Gilbert, W. (2009) An integrative definition of coaching effectiveness and expertise. *International Journal of Sports Science & Coaching*, 4 (3) :307-323.
- (2) 橋本真央, 太田順康, 千住真知子 (2013) 新体操における競技力を高める指導に関する研究－競技者の演技創作に取り組む意識に着目して－. 大阪教育大学紀要, 第IV部門 62 (1) :105-115.
- (3) 秦美香子, 野田光太郎 (2015) 「男子新体操の社会学」に向けて:観客から見る男子新体操界. *女子学研究*, 5:31-46.
- (4) 秦美香子, 野田光太郎 (2017) アスリートが観客に対して持つ意識の質的分析:男子新体操の事例から. *花園大学文学部研究紀要*, 49:49-75.
- (5) 秦美香子, 野田光太郎 (2017) 身体表現/体操競技としての男子新体操. *人間学研究*, 16:27-35.
- (6) International Council of Coaching Excellence (ICCE), Association of Summer Olympic International Federations (ASOIF), Leeds Beckett University (2013)
- (7) 伊藤雅充 (2016) 運動部活動を活かすグッドコーチング 運動部活動の理論と実践. 大修館書店, pp. 159-169.
- (8) 伊藤雅充 (2017) コーチとコーチング コーチング学への招待. 大修館書店, pp. 12-25.
- (9) 伊藤雅光, 小泉卓也, 関口遵 (2015) 日本体育大学大学院コーチング学系に所属する大学院生コーチが修士論文を執筆することの意義. *日本体育大学紀要*, 45 (1) :39-52.
- (10) 公益財団法人日本体育協会 (2016) 平成27年度コーチ育成のための「モデル・コア・カリキュラム」作成事業報告書. 公益財団法人日本体育協会.
- (11) 公益財団法人日本体操協会 (2015) 新体操男子規則2015年度版. 公益財団法人日本体操協会, pp10.
- (12) 文部科学省 (2013) スポーツ指導者の資質能力向上のための有識者会議(タスクフォース) 報告書. http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/sports/017/toushin/_icsFiles/afieldfile/2014/06/12/1337250_01.pdf (参照2018年12月7日)
- (13) 中田吉光 (2009) 男子新体操―選手とコーチの独習マニュアル―. アイオーエム.

- (14) 日本体操協会 (2014) 男子新体操. <https://www.jpn-gym.or.jp/wp-content/uploads/2014/05/bbf4d27533bb90c8577361c8cbe1bb80.pdf> (参照2018年12月7日)
- (15) 野田光太郎, 秦美香子 (2015) 男子新体操研究の概観と人文社会学領域における研究の展望. 花園大学文学部研究紀要, 47:95-113.
- (16) 野田光太郎, 秦美香子 (2016) 競技経験者を対象としたPAC分析による男子新体操のイメージの検討. 花園大学文学部研究紀要, 48:43-61.
- (17) 野田光太郎, 秦美香子 (2017) 日本発祥のスポーツを行う外国人選手の競技に対する認識—カナダの男子新体操選手および指導者を対象としたPAC分析—. 笹川スポーツ研究助成研究成果報告書, :122-131.
- (18) 野田光太郎, 秦美香子, 菅文彦, 間野義之 (2017) 男子新体操指導者の海外派遣事業の分析. スポーツ産業学研究, 27 (2) :121-133.
- (19) 大谷尚 (2011) SCAT Step for Coding and Theorization. 感性工学, 10 (3) :155-160.
- (20) 大谷尚 (2007) 4ステップコーディングによる質的データ分析手法SCATの提案—着しやすく小規模データにも適用可能な理論化の手続き—. 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要 (教育科学), 54 (2) :27-44.
- (21) Ryan, R. M. and Deci, E. L. (2000) Intrinsic and Extrinsic Motivations : Classic Definitions and New Directions. Contemporary Educational Psychology, 25 (1) : 54-67.
- (22) 鈴木智美 (2013) 日本語学習者のための辞書使用のスキル養成のポイント—留学生の辞書使用に関するアンケート調査自由記述欄のSCATによる質的分析を通して—. 東京外国語大学論集, (86) :131-158.
- (23) 佐良土茂樹 (2018) 「コーチング哲学」の基礎づけ. 体育学研究, 63 (2) :547-562.
- (24) 寺下貴美 (2011) 第7回質的研究方法論～質的データを科学的に分析するために～. 日本放射線技術学会雑誌, 67 (4) :413-417.
- (25) 俵尚申 (2011) コーチングにおける動機づけについて. 嘉悦大学研究論集, 44 (1) :44-91.
- (26) 浦谷郁子 (2011) 新体操における美の理論に関する一考察. 日本体育大学紀要, 40 (2) :57-68.
- (27) 囃子浩二 (2014) コーチングモデルと体育系大学で行うべき一般コーチング学の内容. コーチング学研究, 27 (2) :141-161.

- (28) 園田高一 (1994) 体操の構造 日本体育スポーツ教育体系 (体操／ダンス・表現運動) pp.42
- (29) 田中直美, 山本清文 (2019) 男子新体操におけるダンス・アイソレーショントレーニングの導入に関する研究, 花園大学文学部研究紀要, 51:119-143.